

技能習得をめざし、子供同士で探究サイクルを回す — 自他の心身に目を向けながら、チームを作る「球技：ベースボール型」(第9学年) —



ベースボール型を含め、球技ではボールを扱うことに関して、一人一人に経験の差があったり、体力や技能の程度、性別の違いや障害の有無があったりなど、個人の差が大きく出てくることが多い。逆に言えば、一人一人の違いや特性に応じながら、他者を認め、個をチームの中で活かしていこうとする取組が行いやすい。

昨年度の攻撃を中心とした実践から視点を守備に移し、本実践では協働で「捕球」「送球」を分析し、守備位置などを工夫しながら、守備方法を探っていった。自他の特性を理解し発揮しながら、ベースボールの攻防の楽しさを味わうことを目標とし、そこに向かう生徒の様子を追った実践。

1 学びの構想

(1) 9年間のベースボール型単元の学び

体育・保健体育科では、前期課程低学年では投動作の獲得、中学年では易しいボールゲームの実施、高学年ではベースボール型の授業として「ティーボール」を行っている。昨年度、8年生時の本単元の実践では、動いているボール（ピッチャーが投げたボール）を打ち返すことの「バット操作」と、打ち返したボールの距離やコース、相手の守備を考慮どこまで進めるかを瞬時に判断し、素早く走る「走塁」にこだわって授業を進めた。「チームで目指す、俊足巧打」をテーマに、個人の探究がスタートさせ、最終の試合では、一人一人の特性を考えながら効率のよい攻撃で点を重ねながら試合を進めることができた。単元最後には、「次は、守備力を高めたい」という課題をもって8年生のベースボールの授業を終えた。そこで、今年度の本単元実践では、動きながらボールを「捕る」こと、一連の流れでねらった方向へボールを「送る」ことなどの「ボール操作」と、中継プレーやベースカバーなどの「連携した守備」を目指し授業を進めた。そして、昨年度の攻撃技能の習得に加え、守備技能の習得を目指した協働探究を進めるため、テーマを「目指せ、一流選手・一流チーム」として、一流に必要な条件を探り、自分やチームに必要な能力を見つけていくようにする。よって、今年度の子供達が習得しようとする技能は、昨年度の「バット操作」「走塁」に加え「捕球」「送球」と多くなるが、昨年の技能習得に向けた探究活動を実践したことで、よりスムーズにまた幅広く協働探究活動が進められることを期待した。本校体育・保健体育科では、「自他の心身に目を向け、より良い在り方を探り続ける」を本質的な学びと設定し

ている。子供たちが自他の動きや状態・状況に目を向け、その気付きを言語化することや対話することを通して課題を見だし、その課題を思考と試行のプロセスを通して探究し表現することを目指した。

(2) 共に学ぶプロセスのデザイン

「飛んできたボールを確実に捕球するにはどうするか」「捕球したボールを狙ったところに送球するにはどうすれば良いか」あるいは、「捕球したボールはどこに送球するのか」を探る際に、グループの使い方、構えは人それぞれであり、自分にできる「ボール操作」を分析する必要がある。まずは、必要な技能を全体で共有させ、「自分は捕球ができるのか。」「狙ったところへ投げられるのか」といった、「自分のできること」を中心に自分自身に目を向ける。そして、自己分析と他者分析をしやすいように技能のレーダーチャートを使い、比較しながらチームの課題と他者の特徴をつかむ。また、一流選手として必要な技能を共有しているため、守備だけに留まらず、昨年同様に、「バット操作」と「走塁」にも探究が進められる。そこでは、自分では気付かなかった課題の発見や、または課題解決のヒントを与えたり、与えられたりするような場面や、自分一人ではできない練習をペアあるいはチームで行うなど、子供同士の学び合いの場面が多くある。特に攻撃よりの守備の場面では、自分一人のプレーでアウトを取るのではなく、チーム全体で、連携しながらアウトを取っていくことが多いため、より自分の特性をはっきりさせ、自他の「できること」を活かそうとしたり、お互いに「できないこと」を補いながらプレーしようとしたりする。さらに「捕ること」「投げること」の個人の守備力の視点は、「中継しながらより早く送球する」「ベースカバーに入って捕球ミスを助ける」

といった連携した動きとしてチームの課題へと移行し、チーム全体で守備を考える。チームで個人の特性に応じてポジションを考えたり、より出塁や失点を防げるように、相手打者に合わせた守備位置の変更など作戦を練ったりすることで、子供たちのなかに互いに助言し合い、技能のポイントを共有する対話が生まれていくと考える。課題の発見から解決のためへの練習や、チームでの試合を通してベースボール型の授業を楽しみながら、一人一人の特性を理解し他を認めていく心を育んでいきたい。

(3) 運動の特性に触れ、スポーツライフにつなげる

毎年、春夏に行われる高校野球や、毎日のニュースで報道されるプロ野球ニュース、海外で活躍する日本人選手、2022年に開かれた東京オリンピックで金メダルを獲得した野球の侍ジャパンや女子ソフトボールチームなど、国内における野球の人気は非常に高く、日本を代表するスポーツ文化の一つであると言ってよい。しかし、生活の身近なところにある野球ではあるが、野球経験がない子供や野球部が存在しない学校にとっては馴染みがなく、認知度も低い。本単元のベースボール型の授業を通し、子供たちが得点する楽しさやチームで協働して勝つことの喜びを感じると同時に、打って点を取ることや出塁や得点を防ぐことの難しさを感じることで、野球への理解と関心を十分に高めさせたい。そして、今後、野球を「行う」意欲をもつことや、野球を楽しんで「見る」ことができる視点を与えられるような授業にしていくことは、自ら運動やスポーツを「する」「みる」「支える」「知る」といった様々なかたちで、生涯において自ら運動やスポーツに興味をもち、楽しみながら関わっていこうとする姿につながっていくと考える。

2 学びのストーリー

(1) 攻撃のおもしろさから守備のおもしろさへ (第1時)

昨年度のベースボールを振り返りながら、「どうやって多く点をとろう」から単元終盤には、「どうやって点をとらせないか」に視点が変わっていったことを確認することから学習をスタートさせた。

教 師：昨年のCBC(C組Baseball Classic)は、どこが優勝したか覚えていますか？

生 徒：たしか・・・「附属タイガース」。

教 師：そうでしたね。3戦全勝でしたね。

生 徒：そうだった。チームのほとんどの人が打っていた。

教 師：附属タイガースの人は、全員打ってたのですか？

生 徒：はい。みんな出塁したし、最後4番だった上田君が遠くまで飛ばして、大量得点でした。

教 師：そうでしたね。附属タイガースに負けたチームの皆さんは、その時どう思いましたか？

生 徒：僕は全然打てなかったし、仕方ないと思った。

生 徒：守備がへたくそ過ぎた。

生 徒：そうそう、ボールを捕って、投げればなれるほど、変なところに行って、逆に点を取られた。

生 徒：というか、どこに投げればいいのか分からんし。

教 師：なるほど。守備が上手くいなかったのですね。

「バット操作」や「走塁」などの攻撃に視点を置いて技能習得に向けた探究活動を行ったこともあり、攻撃に関しての課題よりも、大会の後半に、「勝つために必要なこと」として「守備力」の視点が新たに出てきたことを思い出したようであった。

しかし、昨年度の実践でも記述したように、本校には野球部がなく、野球経験者もいない。ましてやグローブもつけたことがない生徒ばかりである。これまでのベースボール単元でも、グローブを着用しての守備は経験がない。そこで、実際の守備はどのようなものか。グローブさばきや、送球技法を見てもらい、守備への関心とイメージをもってもらうために、動画集を見せた。1本目は、難しいボールをグローブを使って捕球したり、難しい体制から体を上手く使って捕球したりする名場面集。2本目は、捕球から素早く巧みな送球や、外野から一直線に伸びたり、キャッチャーから盗塁選手をアウトにしたりする、球威のある送球などを集めたものである。

生 徒：すごい！

教 師：特にどんなところが？

生 徒：すごい体制でボールを捕っているところ。

生 徒：あんな簡単にボールって捕れるの？

生 徒：投げるのも早くて正確なのがすごい。

教 師：そうですね。みなさんも、授業を通して、上手くボール捕り、素早く送球して、アウトが捕れるようにしていきましょう。

生 徒：試合では、今の動画みたいに自分たちもグローブを使いますか？

教 師：はい。使おうと思います。

生 徒：えー、それは無理。使ったことないし。

教 師：では、それも含めて、自分がどれだけできるか確かめてみましょうか。

次回に試しの試合をすることにした。まず、チームを作った。どのようにチームを組むか子供たちに聞いたところ、「昨年と同じチーム。」という意見があるなか、「昨年はどうやってチームを決めたのですか。」という質問があった。昨年は、「バット操作」と「走塁」の探究をしていくためのチームとして、ベースボール単元の前単元であった

短距離走の記録からチームを作ったことを説明した。すると子供から、「じゃ今年は、守備が大事だから、投げる力の体力テストのボール投げの記録でチームを決めてみては。」という意見がでた。そこで、体力テストのボール投げの記録を元に、1チーム9人（男女混合。それぞれ4または5人）の4チームを編成した。

次にルールの説明をした。

【昨年の試合のルール】

- ① 男女ペア打席（打者と走者）
- ② 1回の攻撃に4ペア
- ③ 4回裏で試合終了
- ④ 進塁した場合、1塁＝1点、2塁＝2点、3塁＝3点、ホーム＝4点
- ⑤ ピッチャーは攻撃チーム（味方）からだす

【今年の試合ルール】

- ① 一人打席（打って走る）
- ② 3アウト制
- ③ 4回裏で試合終了
- ④ ホームベースに戻って1点
- ⑤ ピッチャーは攻撃チーム（味方）からだす

昨年度の試合は、攻撃に視点を当てるためにアウトカウントでの攻守交代ではなく、1回の攻撃は4ペアまでとしたが、今年の試合は、ほぼ通常のルールで行い、スリーアウトを取らないと攻守交代ができないアウトカウント制とした。そうすることで、守備意識の高まりと、「捕球」「送球」技能の高まりの必要性を強く感じさせるようにした。また、守備意識がピッチングに行かないように、昨年同様にピッチャーは味方からだすこととして、打やすいボールで、打撃にも視点がいきつつ、ほぼ確実に飛球がくる場面を多くした。

最後に、各チームでチーム名を考え、試しの試合に向け、打順と守備ポジションを決めた。野球経験者が不在で、唯一守備ポジションをジャンケンで決めていた、「サニー」（チーム名）を、この実践では追いかけることにした。

（2）課題をつかむ試しの試合（第2時）

授業の始めにルールの確認だけをして、早速試合をスタートさせた。打順と守備ポジションは次のようになった。

- | | |
|-----------|-------------|
| 1番セカンド＝功次 | 2番ライト＝夏香 |
| 3番ショート＝輝生 | 4番キャッチャー＝英汰 |
| 5番レフト＝桜 | 6番センター＝真吾 |
| 7番サード＝優愛 | 8番ファースト＝心美 |

打順は、功次が中心となり決めていった。昨年の授業を踏まえ、「打ちそうな人」を考え打順を決めていったようである。

1回表、チームサニーの攻撃。1番功次がいきなり外野まで飛ばすヒットを放った。全力で走り、3塁を蹴った時点で守備チームの返球がホームベースまでかえってくるが、送球がズレ、その間に功次がホームベースを踏みランニングホームランで1点を取った。その後、1点を追加し、5番桜の三振で3アウト目となり攻守交代となった。1回裏、サニーの守備。相手1番打者が、3球目でバントをしてファース方向にボールを転がした。すかさずセカンドの功次が飛び出して捕球し、ファーストに送球した。しかし、ファーストの心美が取り損ね、ボールは勢いよく隣のコートまで飛んでいった。送球のコースはそれほどズレてはいなかったものの、ボールスピードが速く、怖がってグローブ引いた為である。その間にランナーは、3塁まで進塁した。続いて2番バッターがヒット放ち、相手選手が1塁3塁となった。続くバッターが同じようにヒットを打ったが、打球がセカンド付近に飛んだ。ショートの輝生が反応し、ボールを捕球。そのままセカンド踏んでアウトをとるかと思ったが、そのままファーストに投げた。投げたボールは、次は大きく逸れ、またしても隣コートまで飛んでいき、2失点となった。4番目の打者は、内野に大きく打ち上げたが、ショートの輝生が捕球ミスをして、フライアウトを取ることができなかった。その後も、ランナーの後を追うように守備側が送球を繰り返し、アウトがなかなか取れない展開が続いた。1回裏を終わってみると、11失点していた。試合は、2回表サニーの攻撃途中で終了時間とってしまい、試しの試合を終えた。授業の最後、試合を振り返った。



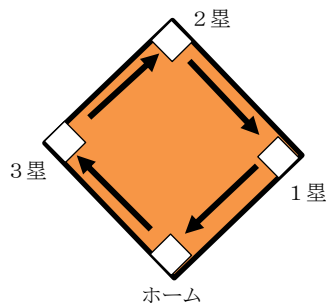
チーム省察

・守備が弱い→キャッチ練習、なげるスピードを上げる！
 ・とれるボールをのがさない！ ・ボールがとばされたときの対処
 ・1塁→岡野 ・ボールを投げるときは先に考えておく！
 ・打たれ負け！ ・グローブがずいぶん

(3) 課題解決の方法を探る (第3時)

試しの試合を受け、それぞれのチームが課題を出し合った。問としては、「試しの試合で、できなかったこと」とした。ほとんどが、「飛んできた打球が捕れなかった」、「送球されたボールが捕れなかった」という「捕球」に関することと、ファーストなど狙ったところに正確に投げられなかったこと、捕球から投げるまでがもたついたことなど、「送球」に関することばかりであった。そこで、「捕球」と「送球」に関して、「どうやったら正確かつ素早くプレーできるか」を、共通の問いとして、チームごとに技能習得に向けた探究活動を行った。

技能習得に向けた探究活動は、昨年度の「バット操作」や「走塁」で行っていたため、スムーズにいくかと思われた。しかし、実際に活動がスタートすると、捕球と送球練習として、「キャッチボール」が始まった。教師側の思いとしては、習得に向けた「練習法」を考えるのではなく、習得に向けた「ポイント」や「視点」を見つけることであった。つまり、正しい捕球方法や、投げ方、ボールの軌道などが分からず、単にキャッチボールをするだけでは、技能習得にまで結びつかないと考えた。そこで、練習の途中に、ベース間を時計回りに4周させてタイムを競うキャッチボールテストを行った。早くボールを回そうとして、ボールスピードを上げるとなかなかコントロールが定まらず、ゆっくり投げるとタイムロスにつながる。



また、捕球側の胸元に投げようとする、男子は勢い余って遠くに投げてしまい、女子は山なりの緩やかなボールになってしまう。サニーのチームでも、輝生がボールスピードを上げ送球する度に捕球側の女子が毎回ボールを1度落としてから捕球しており、心美はノーバウンドで相手まで届けようと、上に向かってなボールを投げている様子であった。

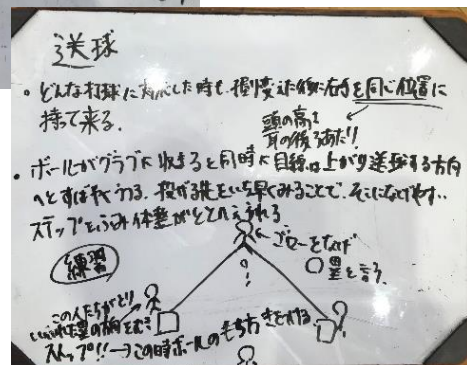
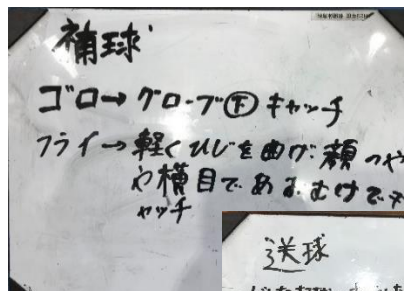
ベース間キャッチボールの測定後、探究に変化が見られた。サニーでは、「どうやったら確実に捕球できるか」が話し合われた。内容は、グローブを縦にするのか、横にするのか、下に向けるのか。または、送球されてきたボールが、体のどの位置に来たときが上で、どこからが下なのかといったことなど初めて使うグローブの使い方についてであった。ペアになって、何度もグローブの出し方

について「試行」がなされている様子であった。一見、授業初めと同じ「キャッチボール」ではあるが、子供たちが自分で立てた「問い」を元にするキャッチボールは、その1球1球が探究であり、課題解決を探る活動へとつながっていく。子どもたちは自分なりに、腰を基準に、腰より上はグローブを立て、腰より下はグローブを下に向けると結論付けていた。さらに、教師から「そもそも捕球する側が捕りやすいボールってどんなボール？」と投げかけると、「体の正面、胸辺り」と答えた。すると、サニーの心美が、「そんなのノーバウンドでは届かない。」と意見した。すると功次が、「別にワンバウンドでもよくないか？」と伝え、次は、「どの送球のボール軌道が捕球しやすいか」の「問い」を立て、「試行」を始めた。

子供たちは、技能習得に向けた探究活動を行う中で、自分にできることと、他者ができることに違いがあることや、自分の困り感と他者の困り感が違うこと、あるいは自チームや他チームの課題が違っていることに気が付く。個の技能や能力が違って当然であるし、個が集まってのチームであるから違いがある。そこに気付きながら、自分で解決の糸口を探ったり、互いに困り感の共有や課題解決の手助けをしていったりしてくと感じた。

最終的にサニーは、送球に関して、ワンバウンドさせた方が、ボールが大きく逸れることがないし、スピードもそんなに落ちないと答えを出した。授業最後に、ベース間キャッチボールをやったところ、6秒縮めることができ、全員が手応えを感じている様子であった。しかし、「捕球」や「送球」にはまだまだポイントがあるが、全てを見つけたら答えを出したりするには時間がなかった。そこで、次回は各チームからの、「捕球」「送球」のコツについて共有するところから授業をスタートさせることとなった。

(3) 自他の特徴を捉える (第4・5時)



他にも「捕球」に関しては、「左手を添える」「膝を落として体で止める」という意見や、「送球」に関しては、「コンパクトにサイドスローで投げる」「外野からは大きく腕を振って投げる」などの意見がでた。できる、できないではなく、動きにイメージを持たせ、目指していくプレーが見えたのではないかと感じた。どのチームも、「捕球」と「送球」に関して、高い意欲のまま、しっかりと調べられ、自分たちの意見が出されていたように思えた。これは、試しの試合での大量失点で、「守備を上手くしたい」「失点を防ぎたい」という強い思いがあったからではないだろうか。実は、試しの試合では、サニーのチームだけが大量失点をしたわけではなく、隣の試合も、2回表で試合が終了し、スコアは1回裏までで、12-9となっていた。改めて、自分たちで課題を見つけ、問い立てていくことは、単元を通しての高いモチベーションとなり、学び合いの活動の充実に繋がっていきと感じた。

共有後、生徒と共に今後について話をした。

教師：改めて確認しますが、単元の最後には、「CCB 2023」を開催します。今、みなさんから出してもらった、「捕球」「送球」の技能を身につければ、大会に勝てますね？

生徒：勝てる！

生徒：勝てない！

教師：勝てないのはなぜですか？

生徒：守るだけじゃなくて、結局、点を取らないと勝てない。

生徒：守ってもミスはでてるから、それ以上に点を取れば勝てる！

教師：そうですね。野球は攻守を交代していく競技なので、必ず攻撃もできますね。

では、「勝つために必要なこと」はまだまだありますか？

ところで、昨年のベースボールの授業では、それぞれの特性に合わせて打順を考えたとありますが、守備ポジションはどのように決めていきますか？

話に続けて、動画を1つ見せた。内容は、守備のポジション毎のゴールデングラブ賞を取った名場面集である。動画に合わせて教師側から、ポジションの特性を加えて説明していった。生徒は、ポジション毎にどんな技能が必要かを見ていたかと思っただが、簡単にボール捕球し送球している姿に、毎回驚きの声を上げていた。

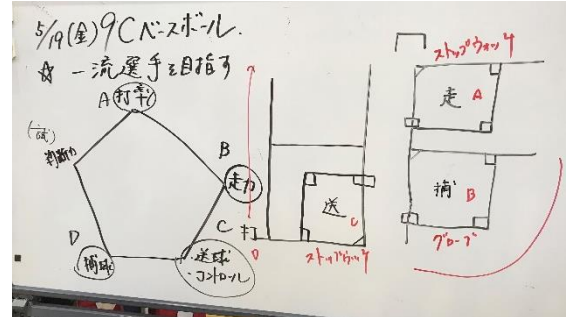
生徒：さすがにこんなプレーができれば勝ちますね。

教師：目指しましょうか。

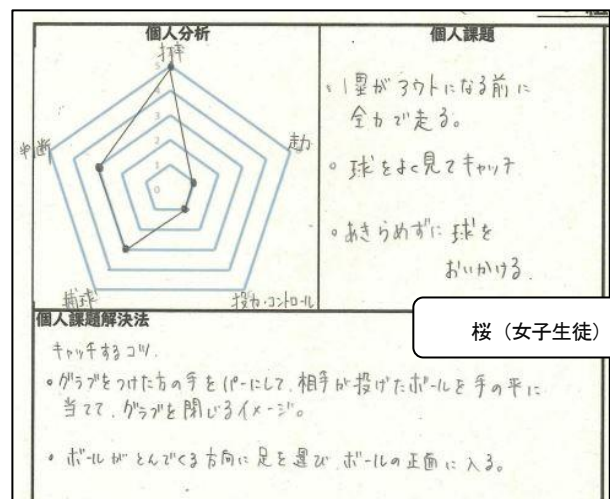
生徒：無理です。でも、あんなプレーができればいいな。

教師：では、試合に勝つための、1流の選手、1流のチームになっていきましょう。

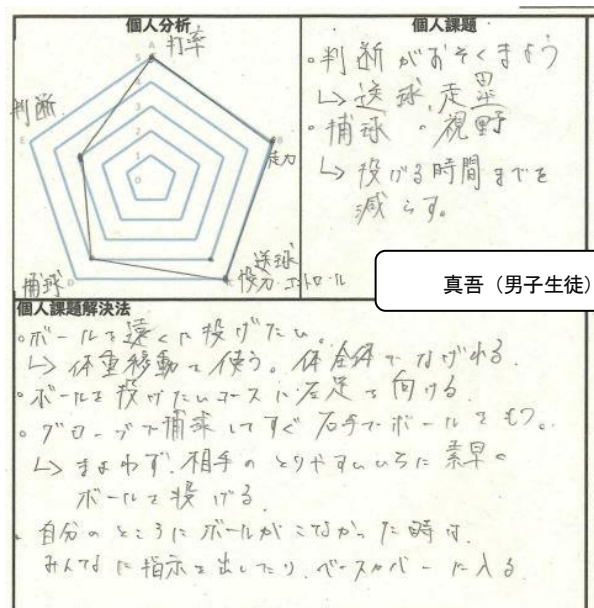
4時間目に単元の目標が、「目指せ、1流選手・1流チーム」となった。早速、「1流選手に必要な条件は？」ということをも、クラス全体で考えた。これまでの授業や、動画集を元に考え、5つの技能を上げた。さらに、それをレーダーチャートで書き出すようにした。



また、自己分析として、これまでの自分のプレーを振り返り、自分で「打率」「走力」「送球・コントロール」「捕球」「判断力」を5段階評価で点数化し、レーダーチャートに書き入れた。併せて個人の課題と解決法を考え、チーム内で共有した。



桜（女子生徒）



真吾（男子生徒）

レーダーチャートをチーム内で見比べながら、個人と得意不得意を踏まえた特徴を捉えることができた。そこで、新たにこのレーダーチャートが正しいか、もっと大きな5角形にするにはどうするかが課題となり、確認と練習の為に、「9Cの中の1流選手を見つけよう」とスキルテストを行うこととなった。各チームから、それぞれの技能についての専門チームをつくり、練習内容とスキルテスト内容を考えていく。ただし、「判断力」に関しては、考えるのが難しいということで、「打率」「走力」「送球・コントロール」「捕球」の4つの能力とした。ホームチームから、専門チームへとコミュニティを変え、自分たちが取り組みたい技能を選んだため、話し合いがスムーズに進みながらスキルテスト考える様子が見られた。



(4) 自他の特徴を確認する

～スキルテスト～ (第6時)

「9Cの中の1流選手を見つけよう」と題して、個人の特徴を確認するスキルテストが行われた。グラウンドに4つのテスト会場を用意し、チーム毎に会場を回りながらテストを行っていった。テスト内容や方法の説明は、それぞれのチームに、能力別の専門グループから戻ってきた生徒がいるため、全体で説明せず、それぞれで行われた。



①打率テストの様子



②走力テストの様子



③送球テストの様子



④捕球テストの様子

サニーチームのテスト結果は次のようであった。

名前	輝生	功次	英汰	優愛	夏香	心美	桜
打率	1.5	3.5	1.5	1	1	0	0
走力	5	4	4	2	4	2	4
送球	5	5	3	4	5	3	3
捕球	5	5	2	2	3	2	2

テスト前の自己分析と比較すると、テストの内容にもよるが、打率の成績が悪かったり、思った以上に送球や捕球の点数が高かったりした。試合に勝つための課題として、打率を上げることとした生徒が多かったが、これを参考に打順や守備ポジションを決めていくことに期待した。

(5) 個の特徴からチームの特徴へ

(第7・8・9時)

「CCB2023」開幕に向け、練習試合を行った。まず、打順と守備ポジションを決めた。

- | | |
|-------------|-------------|
| 1 番ファースト＝輝生 | 2 番セカンド＝真吾 |
| 3 番ショート＝功次 | 4 番レフト＝夏香 |
| 5 番センター＝英汰 | 6 番ライト＝心美 |
| 7 番サード＝優愛 | 8 番キャッチャー＝桜 |

打順は、チーム内ではバットにボールを当てるのが上手い女子ソフトテニス部の夏香を4番にして、男子を比較的早い打順にした。守備ポジションは、内野はボールに触る機会が多いと考え、ほぼ男子を配置し、外野やキャッチャーなど、あまりボールが飛んで来ないポジションには女子を配置する様子が見られた。

練習試合はビデオで撮影し、また打撃記録を取り行った。サニーはラーメンチームと試合をすることとなり、攻撃から始まった。1回表。一番の輝生が、3球目を外野まで飛ばした。いきなりランニングホームランかと思ったが、素早くボールがホームまで戻り、3塁でストップした。続く真吾がセカンドゴロでアウトとなり、3番功次は4球目を打ち上げ内野フライでアウトになった。4番夏香は三振に終わった。相手チームの守備が、初回から試し試合と違って、捕球や送球によるアウトとなったことに驚いた。1回裏、サニーの守備。相手が打ったボールは、ショートの功次の正面に飛び、功次が捕球。すかさずファーストの輝生に送球し、輝生も難なくキャッチし、1アウトをとった。スムーズな流れで取ったアウトに、チーム内で拍手が起こった。その後も、相手チーム同様に内野ゴロや内野フライは、多少のミスはあるも

のアウトを重ねながら試合を進めた。

試合を振り返って、各チームからも以下の様な振り返りが見られた。

サニー	・攻撃が甘かった。強く打ちたい。 ・簡単な打球はアウトにできた。 ・逆に相手が強打者の場合、守備位置を変える必要がある。
A	・打順につながりがなかった。 ・守備位置を変える必要がある。
トミー	・守備の状況判断が悪い。遅い。 ・ポジションを変える。ショートとファーストを入れかえる。
ラーメン	・三振が多い。 ・捕球ミスが多かった。特にフライキャッチ。

練習試合を終え、大会に向け2時間練習を行うこととなった。1時間目は、個人の技能を上げる練習である。練習に入る前に、試合を通してのポジションや個人の特徴を更に細かく数字で具体的に捉えてもらおうと、試合中の「打率」「捕球数」「捕球成功率」「捕球ミス数」「フライキャッチ数」「送球数」「送球成功率」「送球ミス数」など一覧にして配布した。すると、生徒達は、まじまじと眺めながら、数字からポジションの特徴を考えた。

9C スタッツ (5/9)	打 席 数	安 打 数	打 率	ポ ジ シ ョ ン	受 球 数	捕 球 ○	捕 球 ×	フ ラ イ ○	フ ラ イ ×	送 球 数	送 球 ○	送 球 ×	得 点	失 点
輝生	2	2	100%	ファースト	6	4	2	1	1	4	2	2	5	7
真吾	2	2	100%	セカンド	7	5	2	0	0	1	0	1		
功次	2	2	100%	ショート	9	6	3		1	5	2	3		
英汰	2	1	50%	センター	2	1	1	0	0	1	1	0		
優愛	1	0	0%	サード	4	2	2	0	0	0	0	0		
夏香	1	0	0%	レフト	3	3	0	0	0	4	3	1		
心美	2	1	50%	ライト	2	0	2	0	0	0	0	0		
桜	1	1	100%	キャッチャー	2	2	0	0	0	1	0	0		

功次：やっぱり俺のところがボールが一番飛んでくる。

輝生：送球ミス多すぎやろ。

功次：いや、慌てると難しいんやって。特に1塁になげるの。

輝生：俺は1塁でボールを捕ってから、2塁に投げることがあったけど、あれって順番逆じゃないの？

心美：私のとことあまり来なかったけど、飛んでくるやつは全部遠かった。

功次：レフトにもめっちゃいったよな。飛ばされた時のために、輝生が外野いった方がよくないか？

心美：でもライトはほんとにあまり飛んでこないよ。

輝生：じゃーセンターに俺が入るわ。走りまくるし。

功次：じゃーボール捕球するのが多いファーストが心美で、サードは優愛のままにしよう。

ポジションや個人の特徴で配置を考えている様子が伺えた。教師側としては、なぜサードやレフ

などのボールがよく飛んでくるのか、なぜ功次（左利き）はファーストへの送球が難しいのかといったところまで考えられるかと思ったが、そこまでは至らなかった。それからポジションを考えた練習がスタートした。まず内野と外野の選手に分かれ、内野はベース間のキャッチボールを始め、外野はボール高く上げたフライキャッチの練習を始めた。試合を経て、ポジション毎にどんな飛球がくるかを想定しての練習法であった。次に、キャッチャーがホームベースからボールを打って、ノック形式に練習使用としたが、思うようにボールが飛ばなかったのも、生徒の中から効率が悪いとの声のでて、手で投げながら、捕球から送球までの練習を行っていた。練習を考える上で、時間内に効率よく安全に練習をしていくことはとても大切な視点である。

ノック形式の練習をしていると、未だ送球ミスや捕球ミスがあることに気がついた。技術が定着していないため、どうしてもミスがでてきてしまう。「ミスはどうするか」をチームで考えて、次の練習へと移った。

練習2時間目。単元目標の「目指せ、1流選手・1流チーム」を改めて掲示した。「1流チームに必要な条件は？」と問いながら、「チームで点を取る・チームで守る」とは具体的にどんなものがあるかを考えながらチームで練習していくこととした。すると、まずどのチームも変化があったのが、「指示の声」と「場面の想定」であった。キャッチャーがボール投げる前に、「2アウト1塁」と声をかけ、ランダムにボールを投げる。捕球した生徒が1塁に送球し終えた後に、「今のは2アウトの場面だから、3塁近くでボールを捕ったら、そのまま3塁を踏めば攻守交代になる。」と声をかけていた。また、場面の想定を聞いて、捕球した瞬間に、「〇〇に投げろ！」などの指示の声も多く聞こえてきた。更に、隣のコートで練習していた、ラーメンチームでは、サードからファーストに送球される場面で、ライトを守っていた女子生徒がファーストの後ろに素早く回り込んでいた。外野からホームベースに送球される際には、セカンドの生徒がキャッチャーの後ろに入っていた。「ベースカバー」である。すかさず、全体の動きを止め、ラーメンチームのプレーに注目させた。周りのチームからは、「なるほど。」という声が聞こえた。前日の「ミスはどうするか」の1つの答えを見つけたようであった。加えて、教師側から、「連携プレー」や「ダブルプレー」などの言葉や内容を伝えた。すると、練習の中で、「1塁側に転がったボ

ールをファーストが捕りに行くと、1塁が空くけどどうする?」「セカンドがボールを捕りに行ったときの2塁は誰が入るの?」などの会話が生まれだし、チーム全体で確認する姿が見られた。チームプレーでのチームの約束や連携は必要であり、個人技能を生かそうとする考えから、チームで作戦や戦術を立てていくといった視点の広がりが見られた。

(6) ベースボール型の特性に触れ試合を楽しむ ～CBC開幕～ (第10～12時)

CBC (C組 Baseball Classic) を開幕させた。ここから習得した知識や技能の活用場面となってくる。試合の度に、打順や守備ポジションをチームで話し合いながら変え、ヒットを打ったり、点数が入ったりする度に、歓喜の声が上がった。それと同時にアウトを取る度にも、「ナイス!」とチームメイトをたたえ合う声が聞こえ、ベースボールならではの、攻守どちらも楽しみながら試合が進められていた。また、試し試合の時は1回で二桁ついていた得点も、無失点で終わる回も出てくるなど、守備力の向上が明らかに見られた。

ベースボールは他の球技と違い、一人一人がバッターボックスに立ち、いずれかのポジションにつく。必ずボールに触れ、プレーしなくてはならない。だからこそ、一人一人がベースボールに対し課題を持ち、チームでの課題を持つ。むしろ持たざるを得ない。自他の特性に考えながら試合に臨み、単元を通し、全員が主体的に取り組んでくれたように思う。

3 省 察

体育・保健体育科では、子供たちが卒業後や社会に出たときにも、「自ら運動やスポーツに携わり、豊かな生活を創ろうとする」姿を目指している。そのためには、授業で出会う領域や単元などに魅力を感じることが必要である。そして、その方法を運動やスポーツを「する」ことだけに限らず、運動やスポーツを「見る」「知る」「支える」のかかわり方で、少しでも多くの人に運動やスポーツを親しんでほしいという思いがある。また、体育・保健体育科では、「自他の心身に目を向け より良い在り方を探り続ける」ことを本質的な学びと捉え、そこに迫るために、①自他の心身に目を向け、分析的にみる。②言語化して伝え合い、他者と交流し、考え

を共有する。③課題を設定する。④課題解決に向かって粘り強く取り組む。⑤省察する。の5つの場面を設定している。そして、その5つの場面を常に思考的探究と試行的探究を何度も往復させながら学習を進めている。本質的な学びへのつながりを視野に省察した。

(1) 共に学びを拓く

学びを拓く中心となるのは子供であるが、同時に教師でもある。そして、カリキュラムを創る中軸を担うのは、運動やスポーツの魅力を高める「問い」ではないかと考える。子どもが意欲をもって、そして必要感をもって学び続けるきっかけを作れるのは教師であり、質の高い「問い」である。その問いによって子供は様々なかかわり方で領域や単元の魅力に気づいていく。更に、自他の心身に目を向け協働しながら課題解決に取り組み、体育的な資質・能力と汎用的な資質・能力を培っていく。その運動の特性や本質に迫りながら、発達段階や興味関心に応じた「問い」によって、子供自身で学びを広げ、「問い」を繋げていく。

本実践では、「共に学ぶ」ことを、ベースボールというチームスポーツを通して、子供同士の学び合い、さらには子供達自身で、問いを立て解決に向けて探究していくサイクルを回していくことをねらいとした。単元を通してのテーマや問いは、子供達の探究意欲を高める上で重要である。まずは、「試しの試合」より、個人の課題を見つけた。「捕球・送球を上手くするには」「1流選手の条件とは」「自分に合ったポジションは」「ミスをなくすには」「1流のチームとは」「大会で勝つためには」その課題は、練習や試合を重ねるごとに範囲を広げ、個人からペアで解決を探りだし、チームで探るようになった。何となくバッティング練習や守備練習をしていたが、単元を通し、数字にこだわった練習法を考え出したり、時間や効率を考えた練習法を考えたりと、技能習得に向けた練習の内容や考え方に変化が見られた。また、試合では、ジャンケンで守備ポジションや打順を決めていたところから、最後の大会では、個人の特徴を生かしたポジションで考えるようになり、個人の「やりたいところ」ではなく、チームのために「やるべきところ」というように決めていった。まさに、ベースボールの単元を経て得た、ポジション(役割)に対する、「観の変容」であり、学びを拓いた場面であると感じた。この考えは、後に9年生の学級で取り組む「学級演劇」の役割決めの中で生かされることになり、生徒が、「体育の野球の授業の時みたいに、やりたいポジションできめてい

くのではなく、その人が得意なことだったり、演劇の為にやらなくてはいけないことだったりで決めるべきじゃないか。」と話した。体育の学びが、他教科に繋がりを見せた場面だった。

本実践では、

学年が上がるにつれ、「問い」がより抽象化・高度化・複雑化、そして運動やスポーツの本質に迫っていくような「問い」をつなげていき、学び続けることによって、それが学びのカリキュラムとして残っていくのではないか。これは固定して変わらないものではなく、学びの中で子供から新たな問いが生まれたり、子供と教師が共に生み出したりするものだという思いで、副題に迫っていきたい。

（２）省察からカリキュラムを創る

昨年度の攻撃中心の技能習得に向けた探究活動や、今回の本実践を通して、技能習得に向け、分析的に見たり、比較したりと探究していく力が少しずつついてきているように感じた。一方で、探究自体に時

間を使い、授業の中での知識技能の習得には時間がかけられなかった。知識技能を子供たちが探求の中でどう習得していくのか考えていく必要がある。また、探究活動をより深いものにするためにも、基礎的な知識や技能は習得しておくべきか迷うこともあった。「捕球」「送球」では、基本的な動作ポイント、グローブの使い方は、始めに伝えてしまい、それを生かしていく方法などを探究していくことも考えられる。体育で大事にしたいのは「できた」と感じることであり、技能を身に着けたうえでそう思えるようにデザインするのも大切だと感じた。それが、新たな問いや意欲にも繋がっていくのではないか。生徒自身の競技に対する困り感や、「やりたい」「やりたい」という思いを大切にしていき、クラスや学年全体で共通して取り組めるような主題の設定していくことでカリキュラムを創っていききたい。

（赤尾 昌倫）

参 考 文 献

研究と実践の架け橋になる月刊専門誌 体育科教育 大修館書店 2011. 05/2013. 10/2019. 12/2022. 06
真吾昇・佐藤学 体育における「学びの共同体」の実践と研究 大修館書店 2019